

防災歳時記 (28)

—梅若の涙雨—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

母子の悲しい物語

東京都墨田区堤通り 2 丁目に木母寺がある。浅草から東武電車に乗り、4 つ目の鐘ヶ淵で下車する。駅を出て西方に 15 分も歩けば隅田川の堤だ。堤といっても近くには洪水調節用の水門や高層住宅が林立しており、ここに木母寺がある。

木母寺を語るとき、必ずでてくるのが梅若丸母子の悲しい物語である。この物語は、正史実録にはない伝承であるが、隅田川原の露と消えぬとこれほど世人に知られ、ポピュラーになったのも珍しい。寺の秘蔵の「梅若権現御縁起」によると、物語のあらすじはこうだ。

「梅若丸は、吉田少将惟房の子、5 歳にして父を失い、7 歳のとき比叡山に登り修学す。たまたま山僧の争いにあい、逃がれて大津に至り、信夫藤太という人買いに欺かれ、東路をたどり、隅田川原に至る。

しかし途中から病にかかり、ついに隅田のこの地で亡くなった。時に行年 12 歳、貞元元年(976 年)3 月 15 日なり。死ぬまぎわに和歌を詠んだ。

尋ね来て問はば応へよ都鳥



写真 1 改装された木母寺(東京都墨田区堤通)

隅田川原の露と消えぬと

たまたま、天台の高僧がここに来り。里人とはかり塚(梅若塚)を築き、柳一株を植えて標とした。

明くる年の 3 月 15 日、里人集まり、念仏を唱え弔った。梅若丸の母は、わが子の行方を方々で尋ね回り、半狂乱になってこの川原に迷いこんできた。母は柳下で人々が群れて念仏を唱えているのを怪しみ、その故を問いかけたところ、愛児の塚なるを知って悲しみの涙にくれた。

母はその夜、里人とともに念仏を唱えたとき、塚の陰からわが子の姿がまぼろしのように見え、言葉を交わそうとしたところ、春の夜は明けやすく、あけぼのの露とともに

に消えうせた。

夜が明けてから、高僧にこのことを告げ、この地に草堂を営み、常行念仏の道場として、永く愛児の霊を吊った。」

この物語は、強い感動と同情をそそるもので、戯曲、小説、歌曲、浄瑠璃など数多くの作品に登場する。この中で最も古く、かつ有名なのが謡曲「隅田川」である。能「隅田川」で、塚の中から子方(梅若丸)の亡霊が現れる最後の場面は涙を誘う。

梅若忌子方の声のすきとほる

(木下ローズ作)

能「隅田川」の念仏の場になると、いつも泣いてしまう。低い地謡と対照的に甲高い子方の「南無阿弥陀仏」は、美しく哀れた。

涙雨が降る

悲しみのあまり、涙が雨に変わって降るような雨を涙雨かと思っていたら、ほんの少し降る雨も涙雨というのだと辞書にある。

気象歳時記で、涙雨がでてくるのは「梅若の涙雨」と「曾我の涙雨(虎が雨)」である。まずは「梅若の涙雨」から。

木母寺の大念仏は、江戸時代までは旧3月15日だった。この日は必ず雨が降ると伝えられ、人々は「梅若の涙雨」と呼んだ。

今の暦でいえば、4月15日前後でおそらくこのころは菜種梅雨で雨の降る日が多かったのであろう。もともと伝承の話であるから、この日に雨天が多かったか、細かに調べても不粋になるばかりだ。今の暦で4月15日は、梅若忌であるので、もし雨が降ったら涙雨と思って、昔の伝承をしのぶことにしよう。



写真2 隅田川 (東京都台東区柳橋)

日本叙情歌「花」(滝廉太郎作曲)に次のようにある。

春のうららの隅田川

のぼりくだりの船人……

今の隅田川の堤は、がっちり防潮堤で固められ、昔のような情緒は無くなった。

建久4年(1193)5月28日、曾我兄弟の兄の十郎は父のかたきを討って死んだ。陰暦のこの日に降る雨は、十郎の愛人の遊女虎(とら)御前の涙だといわれ「虎が雨」、別名「曾我の涙雨」という。

陰暦5月28日は、今の暦でいえば6月下旬から7月初めごろにあたる(今年は7月8日)。このころは、梅雨の最盛期にあたるので雨の降る確率もともと高く、6月28日ごろは雨が降りやすい特異日ともいう。

降水量の半月別平年値(1971年から2000年までの30年平均値)をみると、6月26日から30日までの5日間は、関東地方以西では雨量がその前後の5日間に比べて目立って多い。まさにこの時期は大雨にも警戒を要する。